

G 北条常久特別企画講座

～「昭和時代」自由と美 そして平和を求めて～(定員120名)

有料講座(1回440円)

会場：秋田県生涯学習センター

戦後・昭和を代表する作家・作品について多角的にひも解きます。昭和の自由と美、新時代にも通ずる平和について深く見つめる講座です。

日 時		テーマ	講 師
G1	4/25 (土)	川端康成と三島由紀夫 ～師弟で日本の美を求めて 『伊豆の踊子』『雪国』／『金閣寺』『憂国』～	秋田県生涯学習センター シニアコーディネーター 北 条 常 久
G2	6/27 (土)	坂口安吾と遠藤周作 ～戦後の混乱から日本人の生き方 『墮落論』『桜の森の満開の下』／『海と毒薬』『沈黙』～	
G3	9/26 (土)	水上勉と吉村昭 ～大衆文学から社会派文学へ 『雁の寺』『飢餓海峡』『戦艦武蔵』『関東大震災』～	
G4	11/28 (土)	五木寛之と井上ひさし ～戦後からの復活 『海を見ていた ジョニー』『青春の門 第一部筑豊篇』／ 『四十一番の少年』『組曲虐殺』～	

G 2 6月27日(土)「坂口安吾と遠藤周作 ～戦後の混乱から日本人の生き方

『墮落論』『桜の森の満開の下』／『海と毒薬』『沈黙』～」

戦後という視座に立った坂口と遠藤が、「戦争をめぐる日本人の生き方」について、それぞれどのような見方を持ち表現したかを各作品から読み解き、対比させることをねらいとして、本講座は展開されました。

坂口は悲惨な戦争の遂行・敗北にいたった勤勉一途な日本人へのアンチテーゼとして「墮落」の必要性を訴えたこと、遠藤は国権及び集団下における日本人の変節性や弱さといった点を自身のキリスト教徒としての観点から鋭く描き出していることを北条氏は論じました。このほか、講座前日に報道された遠藤の未発表小説「影に対して」が見つかった話題にも早速ふれました。

G 3 9月26日(土)「水上勉と吉村昭 ～大衆文学から社会派文学へ

『雁の寺』『飢餓海峡』／『戦艦武蔵』『関東大震災』～」

水上作品の解説において、受講者の方々の強い関心を引き付けたのが『飢餓海峡』についてです。昭和29年に北海道で起きた関連のない2つの事故を主人公の生き様の起点として見事に結び付けた点や、事故の設定年を前倒しさせて描くことで、戦争による傷と貧しさがもたらす不幸をより強調させ、戦争が人の一生にいかにか暗い影を落とすのかという水上の訴えが強く込められた作品になっている点が述べられました。吉村の『戦艦武蔵』については、非常に丁寧な取材を行い書き上げられたことが、植物の棕櫚(シュロ)の逸話とともに披露されました。

戦争には行っていない両作家の手であっても、戦争という題材がこれだけの作品を生み出すに至ること、戦争による貧しさのために何が起きたのかに目を向けるべきであるといった、貴重な示唆が講師から受講者に送られ、本テーマは幕を閉じました。

G 4 11月28日(土)「五木寛之と井上ひさし ～戦後からの復活『海を見ていた

ジョニー』『青春の門 第一部筑豊篇』／『四十一番の少年』『組曲虐殺』～」

2歳差の五木と井上は、ともに、戦後の混乱にさらされた厳しい境遇に育ち、多感な青年期は戦後復興の激しい変化の中を生き抜き、様々な職歴を経た後、直木賞作家として業を成すに至る人生を歩んできました。作家としての立ち位置も作風も異なる両氏ではありますが、自身の姿や生い立ちを投影した作品が代表作となっている点も共通しています。本講座で取り上げた作品のいずれにおいても著者の人生が投影され、別作品でありながらも五木の人生の一連を辿る読み方もできることが示唆されました。井上においても、直木賞受賞作「手鎖心中」の主人公で戯作者を目指す滑稽な栄次郎に、戯曲作家である自身の姿を重ねているとのこと。また、同作の現代版と位置づけられる『組曲虐殺』において、「虐殺」というワードを用いながら、そのような場面は描かれていない井上の表現の「妙」についても言及がなされました。

井上の没後10年を記念した「吉里吉里忌2020」では、五木が井上を「戦友、同志」と表現したことに講師の北条氏は着目し、2人を結びつける印象的な言葉として紹介しました。また、講座には、井上の「手鎖心中」に登場する朋誠堂喜三二の子孫である平沢さんもゲストとして出席され、同氏について語ってくださる場面もありました。

G 1 12月26日(土)「川端康成と三島由紀夫 ～師弟で日本の美を求めて

『伊豆の踊子』『雪国』／『金閣寺』『憂国』～」

北条氏曰く、「奇しくも(大正14年生まれ)三島の年齢はそのまま昭和の年数を表すものであるが、それだけにとどまらず三島の中にこそまさに昭和時代の姿を見出すことができる。」として、特別企画講座の核に本テーマが位置づけられました。三島が抱いた日本の美の原点は天皇より賜った銀時計という名誉にあること、昭和45年の自決が国を動かすためでなく天皇を守るという個人の美学の終点としてなされたことや、『憂国』の文語体部分は日本語の美しさをあえて示すためであること、『金閣寺』では絶対性とは何かを問いかけていること、自身の性愛についての葛藤など、ほか多数について論じられました。一方、師である川端が求める「美」については、代表作『雪国』を中心にアプローチが展開されました。

そのアプローチにおける特別ゲストとして、前教育長・米田進氏が招かれました。同作の一節を堪能な英語で披露されるとともに、原文と英訳では表現が異なることや川端のノーベル文学賞の受賞は、英訳が評価されてのものであることなど、たくさんの御教示をいただきました。